

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：16301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730140

研究課題名(和文) 移民外国人問題の争点化と「国家・民族関係」の影響に関する国制史的研究

研究課題名(英文) State-Nation relationship and its Effect on Minority and immigrant issues

研究代表者

梶原 克彦 (KAJIWARA, Katsuhiko)

愛媛大学・法文学部・准教授

研究者番号：10378515

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：第一に基礎研究として、主に現代ヨーロッパにおける少数民族問題と移民問題の事例と対策、理論的アプローチの整理を行った。第二に帝政期から大戦間期における国家イメージの研究を行い、その成果の一部を公表した。第三にこれらの問題に関し、ウィーンにおいて資料収集を行った。資料は(1)国家形態、(2)文化的属性とその経済的意味合いに従って体系的に収集した。第四に比較・共同研究への展開である。2012年1月に本研究代表者は、「国際秩序変動期の「併合経験」に関する比較研究」研究会を行った。また2013年6月にはドイツ現代史研究会において大戦間期オーストリア国民意識に関して報告し、比較研究へ向けた視座を得た。

研究成果の概要(英文)：Firstly, I've read papers and books related to minority and immigrant issues in the modern Europe and sorted out the theoretical approaches to these issues. Secondly, I've also studied the state image of Austria from the imperial period to 1930's and published paper and a book. Thirdly, I've collected documents related to these issues in Vienna, Austria. The documents were collected systematically according to (1) form of State, and (2) cultural belongings and their economic implications. Fourthly, I've conducted the comparative and joint research. I hold the workshop on the comparative studies of annexations and colonial policies in January 2012. At this workshop we discussed multi-cultural policies and assimilation policies to expand our research topic. I also present a paper on the Austrian national consciousness during the war period at the modern German history research group, obtaining new perspective for comparative studies.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学

キーワード：ナショナリズム 少数民族問題 移民問題 国民意識 国民国家

1. 研究開始当初の背景

(1) オーストリアの移民問題と国家形態

現代の移民問題では移民の異質性がクローズアップされる。しかし歴史的に見れば、移民や外国人の文化的異質性はキリスト教圏のヨーロッパ出身者であっても問題視されていたことがわかっている。だとすれば、移民問題の争点化を促す要因は別の所にあると思われる。

ホスト社会と文化的に異質な集団との関係を考えるとき、19世紀から現代にかけてのオーストリアは非常に魅力的なモデルを提供している。それは単に、この国が多民族国家として文化的に異質な集団との多くの事例を持っていたり、自由党などの極右勢力の伸張が著しかったりするからではない。より重要なことは、この国が歴史的に様々な国家形態をもっており、その時々与国家と民族の関係や自国イメージによって、ホスト社会と異質な文化集団の接し方も変わっていた、ということなのである。

例えば、第一次大戦後、「ドイツ系住民の国家」となったオーストリアは、ドイツ系以外の住民の文化的異質性を排除する傾向を強めた。この傾向は第二次大戦後も続き、さらに福祉国家化の進展によって、文化的に異質な集団は国民と福祉や雇用のパイを争奪する経済的ライバルともなった。もっともすべての外国人が問題視されたわけではなく、1960～1970年代に東欧から来た人々は政治難民として取り扱われることが多かった。それというのも、彼らが当時のオーストリアの「中立国」という自己イメージに全く合致したためであった。

こうした歴史的経緯に鑑みれば、現代ヨーロッパにおける移民の社会統合と文化的異質性の問題にも、別の観点からの考察が可能だろう。ホスト社会と異質な文化集団の接し方に影響を与える要因は、移民・外国人のホスト社会との文化的異質性というより、ホスト社会側の国家形態(国家・民族関係の在り方)や自己イメージではないかと考えられた。

(2) 歴史学と政治学との架橋の必要性

移民問題や民族問題については、これまでも歴史学と政治学の双方で研究されてきたけれども、歴史学は過去のある特定の時代の状況について、政治学は現代の状況について考察することが常であった。しかしこのスタイルは、国家形態と文化的に異質な集団との関係を考察するという本研究の視点にはそぐわない。というのも、国家と民族の様々な関係を実証的に研究しようとするれば、そうした国家モデルは思考実験の産物ではなく、歴史上実際に存在したものでなければならないからである。こうした観点から研究代表者はかつて論文を執筆したが、研究はまだまだ緒にいたらずに、より一層の実証性と理論的精緻化が必要だった。

2. 研究の目的

本研究は国民意識の構造が移民・外国人政策に与える影響を考察する。そのために、第一に、19世紀末から現代にいたるまでのオーストリアの国家の形態に注目し、多民族国家(帝政期)・国民国家(大戦間期から1990年代末まで)・超国家組織(現在)に分類する。第二に、これら三つの異なる国家形態が自国についてのイメージ形成に果たした役割を明らかにする。第三に、この自国イメージが異質な文化集団への対応や移民政策に与えた影響を巨視的に検討する。この作業から、現代オーストリアの移民問題の歴史的な特質を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究の方法上の大きな特色は、第一に、歴史学と政治学の架橋という観点から、一方では資料の読み込みからなる実証的な手法を採用しつつ、他方ではタイムスパンを大きくとることで歴史分析としてはマクロな分析を行っている点、第二に、そうした分析を行う上で単なる事例の集積にならないように、国家形態と時代別に4つのカテゴリーを設けてそれぞれの特徴を抽出・理論化することを試みている点にある。現地での資料収集、国内での資料の読解・分析においてもこの点に留意して作業を進めた。

4. 研究成果

これまでに進めた内容は主として以下の四点となる。

(1) 資料収集

基礎・理論研究ならびにオーストリアの事例研究のために、これらの問題に関する資料の収集をオーストリア国立図書館ならびにウィーン大学図書館において行った。時間と経費の節約のため、春季の休講時期を活用してこれを三度実施した。資料は、のちの理論化を視野に入れて、第一に、国家形態、第二に、文化的属性とその経済的意味合い、に従って体系的に収集した。すなわち、a) 多民族国家期(19世紀末から20世紀初頭)、b) 国民国家期:福祉国家形成以前(大戦間期)、c) 国民国家期:福祉国家形成期(第2次大戦後)、d) 超国家組織と国民国家の併存期(現代)の四つのカテゴリーに分類し、それぞれにおける国家イメージの分析、ならびに少数民族政策や移民・外国人政策に関して資料を収集した。

(2) 基礎・理論研究

オーストリアだけでなく、広く他の国々・地域に関して、本研究に関連する文献の読み込みによる基礎・理論研究を行った。主として現代ヨーロッパにおける少数民族問題と移民問題の事例と対策、これらの問題への理論的アプローチの整理を行った。少数民族間

題については、とくに国制面での対策(中央集権制、連邦制、自治)と言語政策に関する理解を深めた。また移民問題については、外国人労働者政策の展開や国籍政策などの事例から、多文化主義と同化主義(さらには文化的同化とフランスのような「普遍原理」による同化)それぞれの移民・外国人へのアプローチに関して問題点を整理した。加えて、進行形である極右政党の動向についても把握することに努めた。それらの成果の一部は、大学での講義(専門課程および共通教育課程)高等学校での出張講義や高大連携事業での研究指導、市の選挙管理委員会が主宰した研修会での講演に盛り込むことで、社会に還元された。

(3)オーストリアの事例研究

少数民族、移民外国人政策

研究代表者は、かつて「現代オーストリアの移民問題とその歴史的位相」(『日本比較政治学会年報第11号 国際移動の比較政治学』ミネルヴァ書房、2009年、所収)において、帝政期から現代にいたるまでオーストリアがどのような移民外国人政策を行ってきたかを考察した。そこでの知見をさらに、少数民族政策など「文化的な異質な集団」に関する他の動きに広げることで、移民・外国人問題の争点化と「国家の民族構成」との関連を把握することに努めた。これらの研究成果については、今後、下記の国民意識・国家意識の研究と重ね合わせていき、まずは雑誌論文のかたちで公表していく予定である。その試みの一環として、第一次世界大戦における捕虜の労働に関して、国民国家における移民・外国人労働と総力戦下での「外国人労働」との関係性を考察し、これを公表している(梶原克彦「国民共同体の境界 第一次世界大戦の経験・総力戦のなかの捕虜」『愛媛大学法文学部論集 総合政策学科編』37号、2014年)。

国民意識・国家意識の研究

とりわけ帝政期から大戦間期における国民意識・国家意識の研究を行い、その成果の一部を雑誌論文、著書の形で公表した。まず、カトリック民族派の流れに属し、やがてナチスに加盟していったアルトゥール・ザイス＝インクヴァルトのライヒ思想と人種思想について研究を行い、論文を公表した。次いで1930年代に権威主義体制を引き、オーストリアとの合邦を主張するナチス・ドイツに対抗する際にオーストリアのドイツ性を主張した首相エンゲルベルト・ドルフスの国家と民族概念を考察し、同じく雑誌論文として提出した。これら2編と、従来進めてきた、帝政期からの現代にいたるまでのオーストリアの国家と国民にイメージに関する研究と合わせて、一冊の著作にまとめ上げた。これによって、多民族国家としてのアイデンティティが、ドイツ系の小国家になった事によって被った変容と持続性を把握し、とりわけ大戦間期オ

ーストリアにおけるドイツ人意識の問題を明らかにした。さらに、第二次世界大戦後の国民国家との関連を視野に入れつつ、大戦間期におけるオーストリア国民論の系譜をカール・F・フラウダの国民論に注目しながら、公表論文とした。これらのオーストリア国民意識に関して、2013年7月に開催された愛媛日独協会の総会において講演を行い、一般の人々へも成果を広めることに努めた。

これまでに行ったオーストリア国民意識・国家意識の研究成果は引き続き「オーストリアの国民論の系譜学」として公表していく予定である。またそうした国民意識・国家意識と「文化的に異質な集団」への政策との関連についても、考察ならびに成果公表をすすめていく。

(4)比較・共同研究への展開

2012年1月に本研究代表者は、サントリー文化財団の研究助成による「国際秩序変動期の「併合経験」に関する比較研究」研究会を行った。本研究会で、主権国家の形成や植民地における多文化政策や同化政策など、政治体と民族構成との関連が人々に及ぼす影響といった、本研究にも活用可能なテーマについて意見交換を行った。また2013年6月にはドイツ現代史研究会において本研究で得られた大戦間期オーストリア国民意識に関して報告し、比較研究へ向けた視座を得た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

梶原克彦「C・F・フラウダのオーストリア国民論(二・完) オーストリア国民論の系譜学 一」『愛媛大学法文学部論集 総合政策学科編』36号、2014年、19-37ページ。査読無。

梶原克彦「C・F・フラウダのオーストリア国民論(一) オーストリア国民論の系譜学 一」『愛媛大学法文学部論集 総合政策学科編』35号、2013年、77-98ページ。査読無。

梶原克彦「E・ドルフスと ドイツ性 中・東欧の国民国家形成を巡る一考察 四」『愛媛法学会雑誌』38巻1・2合併号、2012年、89-107ページ。査読無。

梶原克彦「A・ザイス＝インクヴァルトとゲルマン帝国 中・東欧の国民国家形成を巡る一考察 三」『愛媛大学法文学部論集 総合政策学科編』31号、2011年、33-55ページ。査読無。

〔学会発表〕(計1件)

梶原克彦「大戦間期オーストリアにおけるオ

「オーストリア国民論」ドイツ現代史研究会、2013
年6月（キャンパスプラザ京都）

〔図書〕（計1件）

梶原克彦『オーストリア国民意識の国制構造
帝国秩序の変容と国民国家原理の展開に
関する考察』晃洋書房、2013年。i-iv、1-203
ページ。

6．研究組織

(1)研究代表者

梶原 克彦（KAJIWARA, Katsuhiko）

愛媛大学・法文学部・准教授

研究者番号：10378515